繪本豐臣勲功記

第八編十卷

繪本豐臣勲功記

八編 壹

へ遠13
2209
71

門へ遠13 特
帙 2209
巻 71

櫻澤堂山編輯
松川半山畫圖

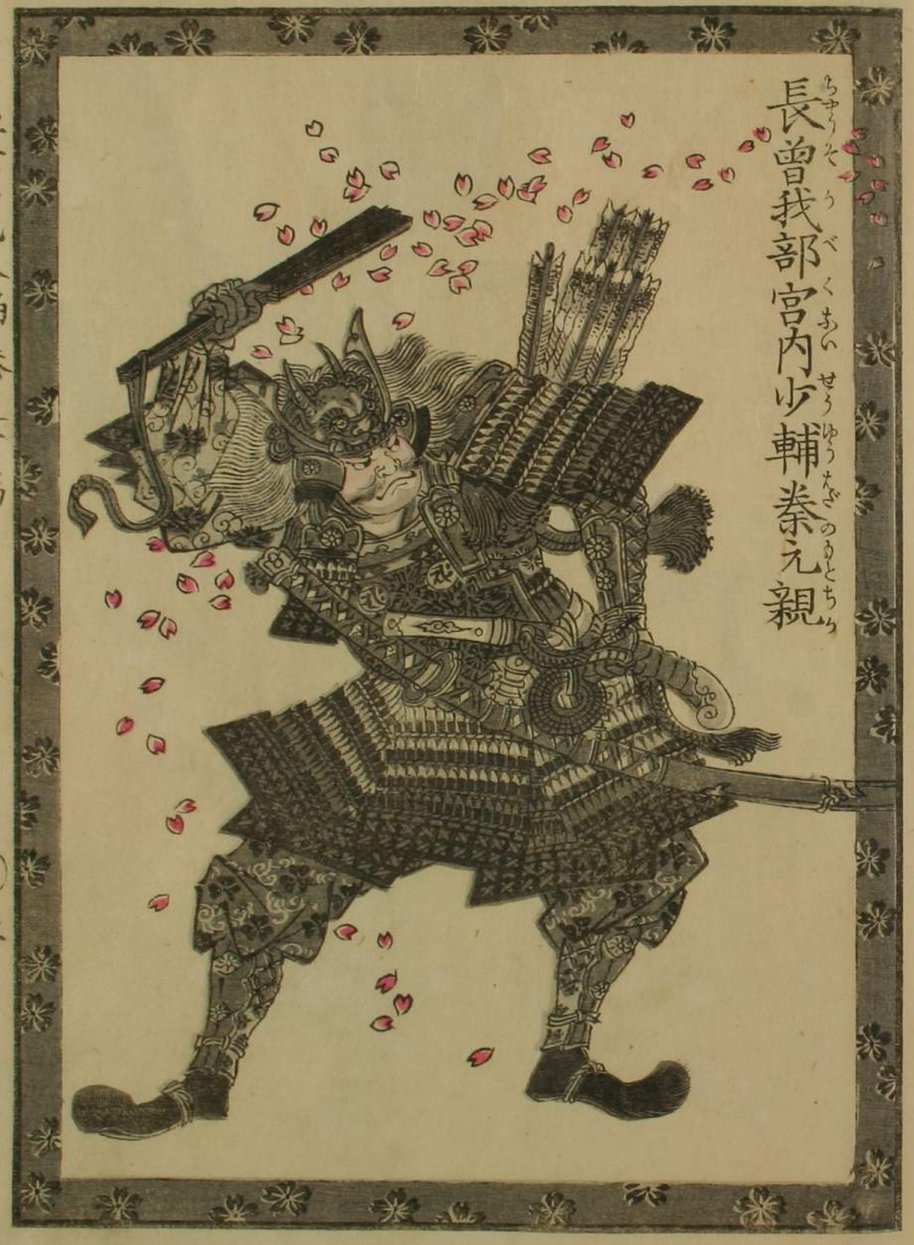
繪本豊臣勲功記八編

大阪書林 聲玉堂
文海堂

一吹能滿天一吸
又周地掬拾界三
千海胸不可議

德水謨賛

羽柴内大臣平秀吉公



長曾我部宮内少輔桑元親

長曾我部弥三郎桒信親

金子傳兵衛尉親忠

加藤主計頭
藤原清正

破竹原猫魔姫

繪本豊臣勲功記八編巻之壹

目録

佐田杜伏勢惱ㇾ柴吉長ㇾ屬　中川乞ㇾ朝
粉川の密地奮戦して霧坂の城を陥す圖
中川一族懐ㇾ怨岳仇憤戰　屬　大谷欵ㇾ欵
佐久間撃ㇾ中川平右衛つ先陣を糞ふ圖

繪本豊臣勲功記八編巻之壹

東京 櫻澤堂山 刪補

佐太杜伏名惱羽柴吉長 属中川乞斜

晉の張華が博物志に謂るが如く。山雞美色あり。自その色を愛して終日水に映せ。目眩々ばせたち溺死せと。世人自己が智を愛し。勇を愛して。慢じ過ぎば自己が智勇に溺死せらる。慎まざんべあるべくべく。浩々る程に。茶編箇條に説起せる。根来寺の強悪僧孫。粉川法印蜜地あるもの。佐久間久左衛門。同源六の兄弟を奸化して。策及の意を起さしめ。羽柴三左衛門吉長の對凝守。河内霧坂の城を隨さんと。諸饗士侍と計議を謀示し。分部氏して僕とも知らむ。霧坂

の城守羽柴三左衛門右長ハ。自部僅ふ率従へ。寶寺寺を總
ゲセる。然ちどふ佐久間久左衛門ふ率て安継。同源六実改ハ。牧浮
佐く田の際なる。樹竹の茂る林中ふ。百四五十の精兵を。密く
と埋伏セさセ。霧濤主膳の別隊ふハ。ときても強き軍卒を。
長蛇ふ備へて候セり。夫通あるゝぬ身の羽柴右長。浩り
りるとハ秋毫紛らねべ。前後の隊伍も疎漏ゲちふ。用然とし
て歩来るを。枕弾正と一奔ふ。丹候ゝる山谷伴太夫新
と見より弛緩り。右長際迎く歩進ゝと。歩ると聆て霧濤
主膳。忽然として隊伍を整し。候際時量ふく右長主従
馬を急ゲセ弛通る。霧濤主膳。山谷伴太夫。百四五十の兵と
一ふ。融を伝て突蒐ベ。忠設ふき車なるも兵。羽柴主
従大ふ綾き。周章ふゲゝこれを遮て。山の根まで率退き。右長
眈と彼方を視て。就華なるベ狼藉なるぞ。疑て山賊野盗ふ
らんゲ。兵華臆セぜ退散セと。声を励ま指揮なるところへ。
耳元ふ鳥銃響弥る。中より一個の強兵ゲ。真先ふ進んぐ
声暴げ。盗賊とハ按外なり。新いふ吾ハ柴田の一族。佐久
間久右衛門安継なるぞ。羽柴へ憤恨ある身なベ。今霄右
長を匂引出し。這場ふして候對ゝり。覚悟とセよゃと叫び
も敵ぜ。百有餘人を二部ふ分ち。隊の半ハ右長の方術とも
つて。右長ゲ茶路の兵を刎させ。隊の半ハ長棟ともつて。後よ
り攻ゝる。中ふも霄崎山谷ゲ勢ハ。恵風の如く烈ハ発接ふ操で
責苛る。敵卒ハ慌忙途を失ふひ。更ふ戦ふ氣力もふく。ゝを

劣らじと逃出さむ。佐久間雲濤山谷が従兵。遁もまじと追
撃ふ。是ぞ為ふ羽柴が雄兵。大軍ハ亂殺せらる。殘る兵士
へ這くふ路も撰ばず散亂す。佐久間安經。実政ハ。雲濤山谷
と一路ふふり。大将と遁もまじと。右長と中ふ推捕圍。百臂
百腕進む滝。風ふ攪る。暴雨の像く。鋒尖の光ハ雲ふ怒る。
翻電ふ奚ふる。これふ因て羽柴方の。従兵ハいふも更ふ。
三左衛門も今ハ既戰死と覺期を決し。亂滝のふと些も怯
まじ。怒夜叉の像く激烈ふし。對敵と撰ばず戰ふ。
滝も突折。擅も薙斬。三尺條の大刀ふ振。縦横無邊と砍
て西周。これふ敵する佐久間兄弟。雲濤山谷の門くハ。尋者
ふる以勇士ふきバ。三左衛門も戰労ふ。既ふ危くふえる不

へ。後陣ふ隙位る佐原清右衛門ふ秋。路茅の敵と斬拔く。
辛じて義ふ走着。面も鰐らで雲濤が。背路より漏て菟う。些
も撓ず接記ふきバ。勝橋る霧濤勢も。暴流の兵ふ崩崩さ
ま。おもはず飯と亂ふ。此ふ右長万丸お遁ふ。危急城
出て息次在と。佐原頻ふ声と拭。這不ふ市心後ふ。蛍落
玉人快くと。勧めあづらも其身ハ怯ずに。勇と奮ふ。
ふ不へ。佐久間源六池来り大旨揚て。羽柴右長帝ふ叫け。
粉川法印よく謀て。既雲坂ハ乘不ふ。汝倚ふふと特怙と
して。新戰と挑むぞや。速ふ戟と伏せ。覺と脱ず降参せよと。
絶まで朝罵るふぞ。佐原が従兵驚惑ひ。其汗虚ありや実
ありやと。踉蹌虚隙と佐久間勢。佐原と央ふ捕捕て。亂炮

ふ撃踈むる。然ども猛忠烈義の豊秋。主人を救出さんと一足半歩も退らぜ。命を棄て防戦する。三左衛門ハ這際ふ。故の圍を通を出。雲坂の城へ帰らんふも。故満さをべ通り得ぜ。諠塊も雑落。馬も涼疲ふ倒をされべ。身窶しくも歩行ふて。四の中畦のゑちもふく。宮寺を当意て喘く蔭雫ゆきる。佐久間兄弟霧濤。山谷ハ。只顧大将を輦捉んと。追蒐るとつふとゆくども。闇秋の戦場ふ任せば。遂ふ吉長を家失ふふこり。然るふ佐原清左衛門ハ。主人を落果せられべ。いなハ既意安しと。戦死の構えをふし。良故あるべと見る彼方ふ。佐久間源六実政ゲ。燎の頭ふ突起すると。渠こそ望む向て仇ふをと。号呼蒐て撃て蒐る。源六虚さを対向ひ。水月風露背沉つ面流つ。諸法の秘のあるごけを。殺刻ゲ際戦ひしゲ。源六焦燥て諸の揉を。持整をよと見へるしふ。怒場一轂槍発鉄砲。覘遠ちを清左衛門ハ。千段板より鎧角まで。血煙をるどく鴻徹こり。源六速くも馬より跳卸。巻秋ゲ首を掻刎て。提鞘をこそ挙こりをも。備も羽柴吉長ハ懐当ざる伏兵ふ。悩まさをつも辛ふ。佐原ゲ救ふ虎口を抜を。夜の風こと曙るころ。宝寺ふ着こりしゲ。浅野長政ゲ陣ふ到り。斯と通じて対面ふし。来使の趣き伏兵の車。凡体ふ品彈をべ。長政大ふうち頷き。這方より使者も達ねバ。正しく佐久間ゲ計略ふ。ん。大将軍ふも渠倚ゲ落方を。御穿鑿きしくるゲ。従来何處ふ躯在て。斯る邪謀をふしる車ぞ。妾

置きざる大事なきと。取品も取敢ず秀吉へ言條を大將これを呼召き席を設て賜らせ玉ひ。憎き佐久間ゞ拳動ろなり。其怨あゝバ雪仮も既落城ゝ迫びゆゝんと。弭もいまゞ早らざるゝ同國烏帽子形の城より紅馬来りて。佐久間久右エ門兄弟の者。紀州根来寺の悪僧を荷擔来ひ。霧仮の城と乘取法師を亂妨つゝまつきバ。急ぎ陣勢を當向らるべふ。歸ひさてまつると注伸を。秀吉まもく憤怒し玉ひ。顧ハ寸刻も許しゞがさゝ。即地ゝ誅伐せぎんバあゝぎと。蜂屋出羽守塩川伯耆守ゝ指揮せゝを。向ふべき由と命出さる。响ゝ中川秀春ゞ守保士。中川平太郎つゝ清纐陣ゝ出て訓ふらく。月さへ日さへ遠くも構てゆ。ゆつる友の初天兄ある中川清秀清秀。綾ゞ嶽の枝寨ゝおいく。佐久間ゞさめゝ戰死ーゝを。佐久間兄弟の族軍ハ。吾侑ゞさめゝハ。報讐せべき敵ゝハ。帰くハ這遭の先陣。秀春へ命屬らるべふ。只顧願ひとてまつると。懷投て嘆訟を。秀吉ゝも敵より。中川瀬兵清ゞ戰死と。涼く惜まセ玉ひりをべ。今平太郎つゝ願ふところを。撿ゝ理とおゞしめされ。塩川蜂屋ゝ鄉セ玉ひ。紀河の刈郡を亂妨しゝる。佐久間兄弟の兵輩ハ。中川ゞさめゝハ親兄の大敵あり。渠清ゞ先進を望まゝハ。忠信孝義の至るところ。一端両士へ先進を命ゼーゝど。両士も中川とハ同國の舊友あり。先言を変ぜるハ。二軍制令の法ゝハ背ゝど。おのゝ叫るゝ義理ゝして。接ゝき取望ゝをバ。乃夫ゝ免ゞ先進お。中川へ

粉川密地智勇と
振ふ〳〵霜坂の
城を陷し留主
三条と猛
殺も

譲り玉まるべーと。至理を解て屈服セさせ蜂屋塩川両将と。後陣ホこそへ定めさき。これホ因て中川清秀ハ。先陣を退出発軍の。准備もつとも嚴おゝしーハ。後ホ勇士の精志おゝ久理

中川一族懐賊嶽仇憤戰　属　大谷敷歟

氷ハ弘より牢ーといえども。春ホ至りて全き緯絲なば。今此ホ務川法印佐久間ガ族雪吸の城と乗取。是を擾で堅おゝりとまるハ。春日の暖を迎へて。溯氷ホ産ー。朝日を熱て薄霧を屏として。頼むホ似より。然ホどホ中川平右衛つ清秀ハ。先進の令を被りて。繞記と限りおく。這軍ホこそ佐久間兄弟と撃提て。終ガ嶽の耻辱を雪ぎ。鬱憤を散ぜんと。主ガ繞べ

従臣も。奮そきくホ親と撃まき。子と毆きる宿怨あまべ。誰ク八一個繞まざゝん。勇気平日ホ十倍して。奔龍走虎の威と弱ー。其隊の繞名一千餘騎殊ホ先進おゝりれば。天地も震動まるだりホ。務吸畜て奮発き。二の陣ハ蜂屋出羽守子二百餘騎。又手又塩川伯耆守ハ背道の将として一千餘騎を引率ホー。先陣ホ弛向へべ。後陣ハ羽柴三先来つ八百餘騎ホて継より。楼記く弛発して速くも那地ホ会ホどホ。憤恨積りー中川勢。共ーも猶後ホきバこそ。城門近く逼進せく。先くと攻会クるホぞ。城主おりクる法印蜜地ハ。博学多才の悪僧おきべ。妙計ともて進会と防ぎ。退崩きこと亡七度。初ホ勇気激然る。中川勢も攻倦く。自会も大軍頭ひ

くれば。一應勞を休めんと。おのく退陣せゝをゝう。是が中ホ大谷慶松（吉隆）右隆ハ遠遭の軍謀ホ秀吉これ伐為副ろ。ろゲ。智計話き勇士あり。接戦の初より城中の態を解く視量り。羅を抽で法將ホ鄉ひ。小丈熟く城名ぶ。防禦の相と覗ふホ。佐久間兄弟ハ勇ホ多ありて。戈智ホ疎き輩ありろ。別ホ智策ある者ありて。車と料理と覺へう。然バ蝎寨といふとゝいとも。要崖尋考ろ。ざきべ。力と以て攻陷さんろ。勿くホ稱ふまど。咱一計と施さんホ。各將用ひまふホや。計義斬く如くありと。裸しろ。ホ法將も宜とし。然バとて其豎日。蒔び城と捉圍こ。只一樓ホと採記ろ。陷ろ所へ東南の山際より。其勢幾千とも見分れども。紙の旗筵の旌お

もひ〳〵の旒を建て。推出しる一軍あり。羽柴の勢ホ近づくやいなや。名統と敗荒。最暴未攻荒ろホぞ。ア得ホ勇武の羽柴勢も。背崩して狼唄噪ぎ。右往左往ホ散亂ま。城中ホハ佐久間と叛傑氣の輩これと寄て。其ハこそ郷民一揆と記して。進名と悩まと覺えう。時ハ得ぐさ〳〵失ふべうゝ。退伐セとや名軍と。繞進て推出さんゝ。法印これと嚴しく制して。一個も城を出きべ。佐久間霧崎村井ホんど拳を振て控へつも。進名の崩ろゝと見聲まるホ。一揆ままく強き態あり。佐久弓兄弟今ハまや。怯へれて密ホ准備し。霧崎村井と後陣ホ継クセ。崩ろゝ進名とおもしろゝと。息おも次ぐも。逗荒う。羽川法印これと听て驚傾ふ。恐らくハ

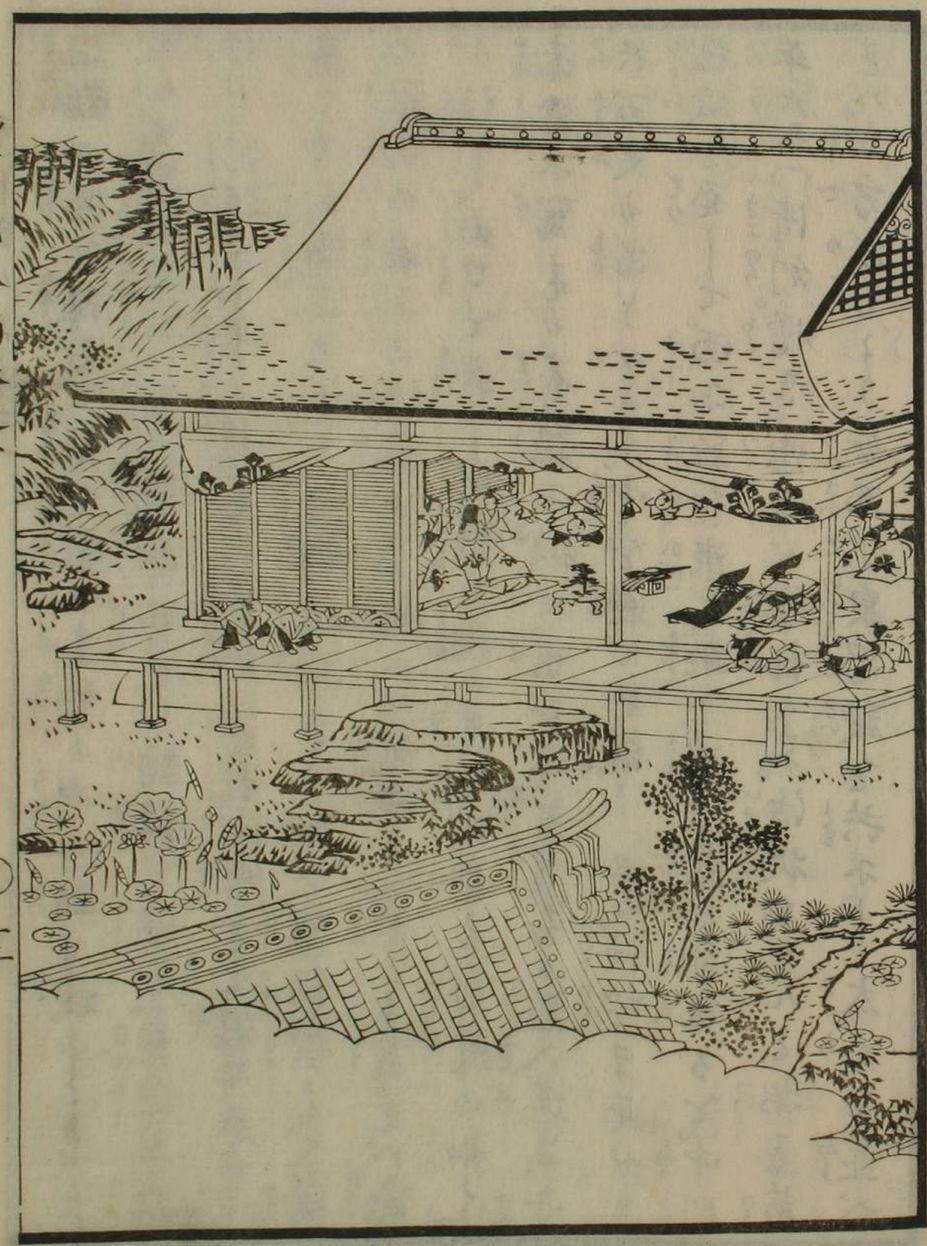
それ進兵のうちに。敵謀を構へて陽兵を。匂引出しうゐ
ゐん。方僅ハいくとも拾ゝさまし。救たまぎんべあるべうゐ
ぎと。下縣兵庫山谷伴太夫に。三百餘人の兵士を様。お
とと慕ふく弛発させ。自方の曉蹊ゐるにやと。小要特ま
てども自軍も帰らぎ。他軍も亦進まざきべ。法印まきく
胸を悩ま。方僅ハ自己も堪得ぎ。扶彈正左衛門。警山
十郎兵衛に。十人力石小平太を随へ。三
百餘人を魚鱗に備へ。同じく協を推発せ。這胸佐久間
安継。実政。霧濤。村井の門くハ。自己ゞ武勇を擬力とし
て。進兵の散亂ゐしるを。吾撃拉んと先を牟ひ。蓑地
に進ゝ来りしゞ。忽然として前面に。敵一人も寄へさ。

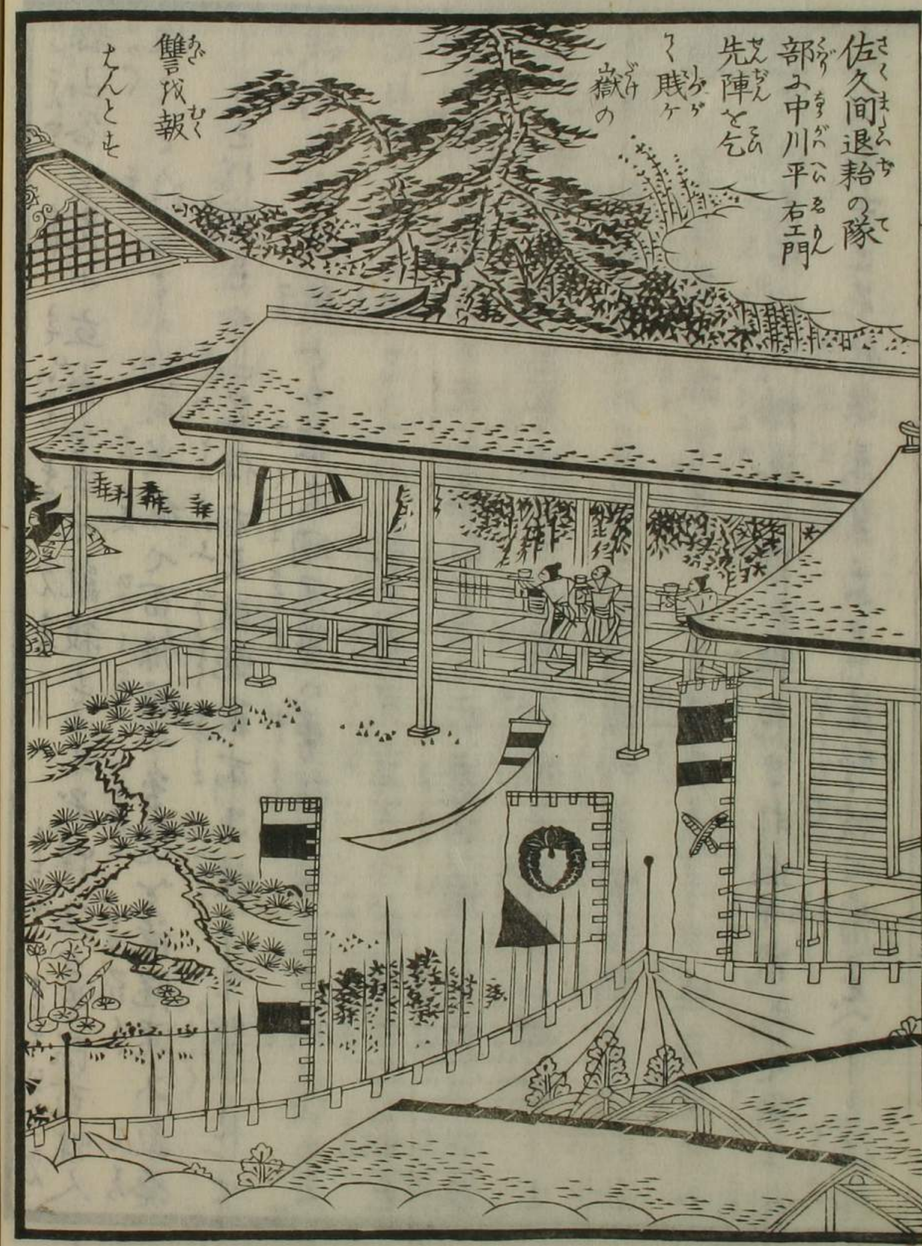
きべ。訝りゐゞ山際と。南西の方へ繞ると等しく。中川平右
衛門ゞ三百餘騎。咸を伝て佐久間倚ゞ後陣の方より弓繞
と連発。勃然として起ゐ。佐久間ゞ軍卒慌忙き。隊伍を立
んとする際もあゝセぎ。先に進ゝし騎馬の中より。是ハ中
川の自中に。小泉大左衛門。安西助十郎ある。ゞ。然ゞ
嶽の恨ある。佐久間ゞ一族命を決セよ。覚えるると呼え
り奥ゐり。棟具を揚て掬て蒐る。佐久間霧濤村井の三
将備ハ進兵の謀略に。陥投るるとてろづけども。今更退
に路もゐし。自勢を激して。小泉安西に接合。死生を厭
ずに挿く。敵へ。中川平右衛門清列。大刀の鋒を胸に。
迎馬を踊らせく。佐久間兄弟に迫づき。大音声て

いろふ佐久間兄弟の軍。絲々嶽の一戦ふ。兄清秀を殴きて
より。憾恨片時も忘れざるし。その鬱憤の餘狭ぞや。先弱
常ふ勝負せよと。正斜ふ馬跨出セバ。佐久間安継大ふ怒
り。全じく鎗を晃して。平右衛つふ搦て蒐る。雙方劣らぬ
勇士なれバ。合まる鎗ハ火の如く。水の如く。瞬もセで戰ふ
数り。右方ふハ安西助十郎。左方ふハ小泉大右衛つ。三百餘
騎の衆と懋し。佐久間弟一個も剰さず。鏖ふセよ逸れ
ふと。烈火の像く搦伏蕩起。髑丘血河ふ。馬足も牛ハ没
まるだり。怒殺活く攻る。霧晴村井も拔延の。做損
てハ面目ふしと。勇憤猛怒ふ気を激し。村井ハ一段霧
晴より。馬を進めて小泉ふ躍雷の像く撃て蒐れバ。主昭

も渠ふ劣らじと。助十郎ふ突て蒐る。然ども安西小泉ハ。奮
激平生ふ百倍して。遂ふ霧晴村井の二個を。一左右段ふ斬
て落す中川平太衛つ清幼も。佐久間久右衛つを扨せんと。勇気
を懋し。楼名りるも忍ず。傍の安継稍危く。浅痍ふ成りも
敢ら不ふ被り。殴るべふ見えるところへ。弟源六実政ぶ。獅
子奮迅の猛威ふ激り。兄を殴セ。と平右衛つ。撲筋違ふ搦
て蒐ると。中川党ふも安西小泉。三百餘騎を武者恒ふ。
佐久間兄弟を正央ふ捉禍。剰さ。まじと。擬起セバ。傑気の安
継実政も。膂力劣て又決も。純り。最至危ふく見る時。撥
う。下縣名庫。山谷伴右丈。務川法印の指揮を承。自軍の安
危いぐふやと。窺ひつも此處ふ来り。斯と看より三百餘人

面も觸らぎ中川勢の。勝奢る直心へ。喫と嗅て整て惹るを。勇気ふ凝る中川勢。退つ捲りつ稍ふ霎晌。刀火諸煙ふ。甲冑も。爛るだりふ接合しぐ。飽まで猛き中川勢も。暴兵の救軍ふ掛崩さを。四方へ飢と退散ふぞ。這隙ふ下縣山谷ぐ三百騎。佐久間を救ふて霧坂へと。十町許も退てゆく。茅路ふ喊の声起りて。蜂屋頼隆ぐ一千餘騎。忽然として旌翻し。佐久間下縣山谷倚ぐ。退往道と塞る。敵兵大ふ驚顛ふし。茅ふハ蜂屋後ふハ。疲もれども中川勢。疏と呼び虎と嘯。鐵網石罠と羅る如く。今ハ勿く賢あるも。通るこちのあるバこそ。進退此ふ極りて。鞠果る行あり。佐久間兄弟茅後と視て。猶て敢ふ活捉まんより。潔く戰死ふさんと。下縣山谷を先ふ立。命を奉て亂殺まるふぞ。蜂屋ぐ先隊百餘人迫こと進こより。筒尖揃て百餘挺の弓筒と。筒縄速ふ亂発しりをバ。衰もや山谷伴を支流炮敢而ふ被りて。爛くとして殺倒せらる。然ども佐久間兄弟ハ。勇猛もとしも減さバこそ。死ねや〳〵と呼たり〳〵。雷火電光。嵩うつ波。沙石を飛も風の條く。嵩るを快と接起もど。稲裏行圍の大敵ふ。促兵全く毆殺され。兄弟もたや涼痺浅瘢ふ。渾身ハ鱶鰐とふり。既ふ戰死もべふところへ。粉川法印自勢を懋き。抜征ふ〳〵る自軍の征を。意下ふく返来りしぐ。遥ふ望めバ佐久間兄弟。中川蜂屋ぐ勢ふ樊包まれ。血吹嵐起て戰ふ相あり。又辛こそ伏兵来ふを。先撃破て脊まべしと。法印




佐久間退耆の隊
部み中川平右エ門
先陣を乞
く賤ケ
嶽の
讐戍報
むんとせ

正剱ハ馬を踊らセ。袷を撚て多勢の中へ。掷て投ると看え
るゞ。忽地左右へ七八歩。屠却せる鮪鱧の係く。首足を重
ねて突殺さる。中川蜂屋ゞ軍卒ハ。これハ怖ぢて逃るもあり。
屈セず向戦ふもあり。從横進退ぢる欲を。強弱撰たで。袷
の能尖の近ぶざけ。茅より對へバ掷僵し。照より蒐ぢバ抛
り仆し。死力を発して戦ふ相ハ。黒風ハ乗る白虎の如く。
赤雲ハ駕ぢる青龍ハ似て。世ハ未ゞ有ある悪入道ハ。千
兵万丈も当りがたく。中を避てぞ通し〳〵る。法印ぢ〳〵
猛威を発して。西ハ紅乾東ハ跳り。凛〻然と純匹るを。中川
平太郎つ清刈。憎き悪傍ゞ擧動ゞハ。活捉ハせんと掷て蒐
ぢバ。左方右方より安西小泉怒殼を共ハ〳〵太刀を並べ。

二方一時ハ攻ぢ来ると。不敵の法印殊ともせぢ。右ハ撰り左
ハ合セ。茅ハ弦を後ハ密を。千変万化の術を盡して。上袷下
解百段ぢ〻り。花血を散して戦ひ〻〻ゞ。密地勇気や愕り〻
ん。左方ハ受る安西と。鞦末ハ退西し。胸板因者て掷出ぢ
袷尖。承んとぢるハ膀力迫ぢ。袷ハ斜ハ助十郎ゞ。腋の下よ
り肩尖まで。突串ぢて喰ともいたゞ。馬より落て死でゞり。
平太郎つもこれを視て。老猫却て窮鼠ハ齒ゞ制詰あり。自
方の名を殘ゞ。勝る軍の功をも亡せん。ぢや退取と征擋
鳴し。軍を纏めて退返セバ。法印もこれを逐ぢ。毆殘され
る自方を率伴。疎名を枝ゞて先ハ進ませ。法印ぢ〻〻毆
紅して。雰坂の方へ路を求ぬ

大谷右隆謀奪返霧城　属　蜜地紋吉

一卒恨めべ天色曇る。時てや勇士の忠憤ふおいく おや。然るふ大谷慶松右隆へ。諸將とそれ〳〵ふ配隊ふ、情名を授て城中の。蹺蹊を逐一探らせつも。其身ハ僅七八騎ふく。小堆き丘ふ登蹈り。自方の進退城名の。動静を見察り在りるが。既ふ粉川法印が。出城〳〵ると看て悅び。時分ハ比と暗冥の旌を。颯流こ〳〵颯と振動せべ。霧城の背路ある。山隙ふ伏さりし。羽柴塩川が西軍勢。一万八百有餘人。躾を伯て発り起。先隊ふ備えし。数百の名流。撃蒐こ〳〵逼進う。城の内ふハ城警山。浩る高名のありとも知む。敵の徑ハ敢進ふべと。弓名流を射窓紙りし。要時ハ待とつふとつへども。故一人も進ざれべ。今ハ心寧〳〵と閑断して。休息ふ〳〵る其所へ。背方ふ当りて耳迫く。喊の声の听えりきバ。慌忙き。噪動ることハ方ふ〳〵む。弓徠炮よ陰太刀よと。天地東西の辨も忘き。狼唄廻るそのうちふ。進軍の斜將羽柴三左衛つ右長ハ。先日粉川ふ欺計らき。敗北せ〳〵と憾念ふおもひ。恨肯隨ふ徹し〳〵るゆ。雑卒までも怒力を発〳〵て。矢推ふ接起りるふぞ。難ふく圓風と共破り。咤く声〳〵て殺投りきべ。後陣ふつゞき〳〵塩川勢。隙隙もあ〳〵せぞ楯と敵き。躾と嘶りて亂投縦横まれども。凝もる輩ふく。城名ハ先と取きゞと。面方のく〳〵より逃てもく。然ども。警山十郎名糸板彈正左長つハ。今ぞ一生命と。自方と懋〳〵拒抗〳〵ると

も。羽柴塩川が流れまるゞ。崖る〻自方ゝ引紀らも。偖崩
きゝ面門より。踏くとして逃出さり。塩川羽柴へ平
も濡さぎ。紙軍輩を退出し。城を奪返せしゝ。ゝど。繞悦
まること限ゝく。法卒の労を志ぎ〻慰め。纔ゝ休息せ
させり。扨警山の両人へ。剰ゝ嚴〻〻接起らも。一遮ゝ
も迫だぶして。城外へ退出されしゝ。自方へ大軍帰武士
ゝもバ。皆散くゝ逃失て。十四五人ぞ殘りる。今はもや率
返もとも。酩上の噪ゝり。切ゝき事ゝ徒死せんより。死場と
通きんゝは如じと。姿を寞して風走〻り。茲ゝ力石小平
太へ法印と共ゝ出城せしゝ。遠慮ゝ長さる密地ゝもも。
城中の防禦こゝろもとゝく。力石ゝ謀含め百騎ぞりを

分與。半途より返されるゞ。隊番ゝ引ひゝ後もるゝへ。城
辺迫く来りしところへ。既塩川羽柴がさめゝ。霧坂の城を乗
取も。扨警山も零失て。力ゝ特ぞ自然もゝるもバ。鞆果て立
るところへ。弱川法印密地。佐久間兄弟を救出して。霧坂へ
退返せしゝが。ぞや途中ゝて是を吟。半へ驚き半へ怒り。力石
も一隊ゝ〻して。城を荐び奪返さぎんバ休べうゝぞと。毆
殘れる群武士輩。百四五十を魚鱗ゝ備へ。法印ぞづら
正斜を紅もバ。佐久間兄弟これゝ継。下縣力石を翼として。
揀器を鳴し。鼓を拳。面門の鳳凰へ推進る。城中ゝ塩川羽
柴が一ゝ八百有餘人。城を奪返しられば。殺気十分ゝ
のゝ〻ゝ。疲も全く愈さり。も忘。何ゝ逃も猶餘ゝ

まべき。弓矢を雹雨の條く。際もあらせむ亂発しく
きバ。子得ハ猛き粉川佐久間も。攻侵で躊躇るゞ。法印決
度沈吟しつ。徐ろき軍せんよりハと。自矣を纒めて退返き。
塩川國満これを視て。敵ハ浮足あり。追ひ繼けと馬鐙
出し。面門の風を飄と開く。三百有餘騎繞あらゞて。
大濤の涌ゞ如く。疲斷る敵中へ。會釈もふさむ驀て蒐
出バ。軍ハ痛を被ふ野武士輩。遮つる勇気もあらべこそ。
逸足出して紋走ふ。然ども怯まぬ法印佐久間。近よる
敵を斬散し。這勢威ハ圧せむして。忽入ハせよと指揮と
ふ。猛然として戰ふ和へ。粉川佐久間退來る。中川
蜂屋ゞ二隊の勢。後背より毆て蒐きバ。城中よりも

柴右長。勇士撰て二百餘騎。剿きまゞと三方より。焙るゞ如
く。烹ゞ如く。火焔を飛して攻起るきバ。武勇絶倫の粉川密
地も。茅後の大敵ハ辟易ふし。無解ハ死んも益ふるきま
バ。通るゞ。ざけハ雷舒よと。佐久間兄弟と加護つ。辛く一
方の活路を開き。ゞづるハ通出さるゞ。林柴中川塩川
蜂屋通きまゞと。遁起る。響怪しげある雲起りて。猛風暴
雨驀然と。霹靂を驅て。注上ハ発り。石を飛し。樹を倒し。
天地も分さむ鳴動しゞきバ。自軍も進退を得む。面を伏
て。行立しる。這際ハ法印佐久間兄弟。何方跡もふく。雷
矢ゞり。稍風雷も鎮りて后。力石下縣とも返ハ那地ハ。活
捉擒捕。雪奴の戮場鎮りしゞども。粉川法印佐久間兄

中川勢奮怨と
含でく佐久間兄
弟と悩し粉川
三地を
扼ぐ

弟を毆漏しるを怨む。法將それ〳〵に方配ホし。行方を尋探るとゝへども。韋て所在の知るざるべ。先這得と大將へ注伸せんと。大谷右隆ホらの四將も提軍を仔細ホ言條ホしうる

羽柴殿撰工匠築大坂城　属信雄究宦

神世ある破風堅木の棟昂るを。只八弓ホして究ぬべきホ。廣大ある〻ホ。這ホ結構しを〻へる殿閣ハ。九天をも承塵ホしつべく。千海をも盆池ホしつべし。然バ羽柴秀吉ハ。亜哉平定しを〻ふ后も。猶宝寺ホ結居しを〻ひ禁中衛護せらるゝ。貞禄の初より。將軍家代〻京都ホ構居し。諸侯と叅勤せさせらるゝ。東國の防禦容易〻らねバ。孫舎をもて要害の絶所ホ管領を置るゝホ。天文の末後より。西國ホ豪家多く英雄屏張ホるゝ。此方の隙禦ホくんバあらずと。信長公ホも最初より。其准使せらるゝ。然ホ固て羽柴殿ホも。千思万慮ホ本源を涼ふ。陪京の所存ホきホしもあらざれども。是非ホ西海の。守鎮を專ホせずんバあらずと。膽を砕て工夫せるを。地の利ハ勿論。鎮相應の勝地ありとて。快より盛達置るゝ。摂州東成郡大坂（是ハ石山より門徒本願寺の跡なり）の地ホ。大城郭を結構せらる。其創草の當時。天正十年九月ホして。指監ハ淺野彈正長政。堺田右衛門尉長盛なり。又半番匠の棟梁を。彼此と選擇しを〻ふ。幷も聖德太子より已來。四大工の棟梁家あり。

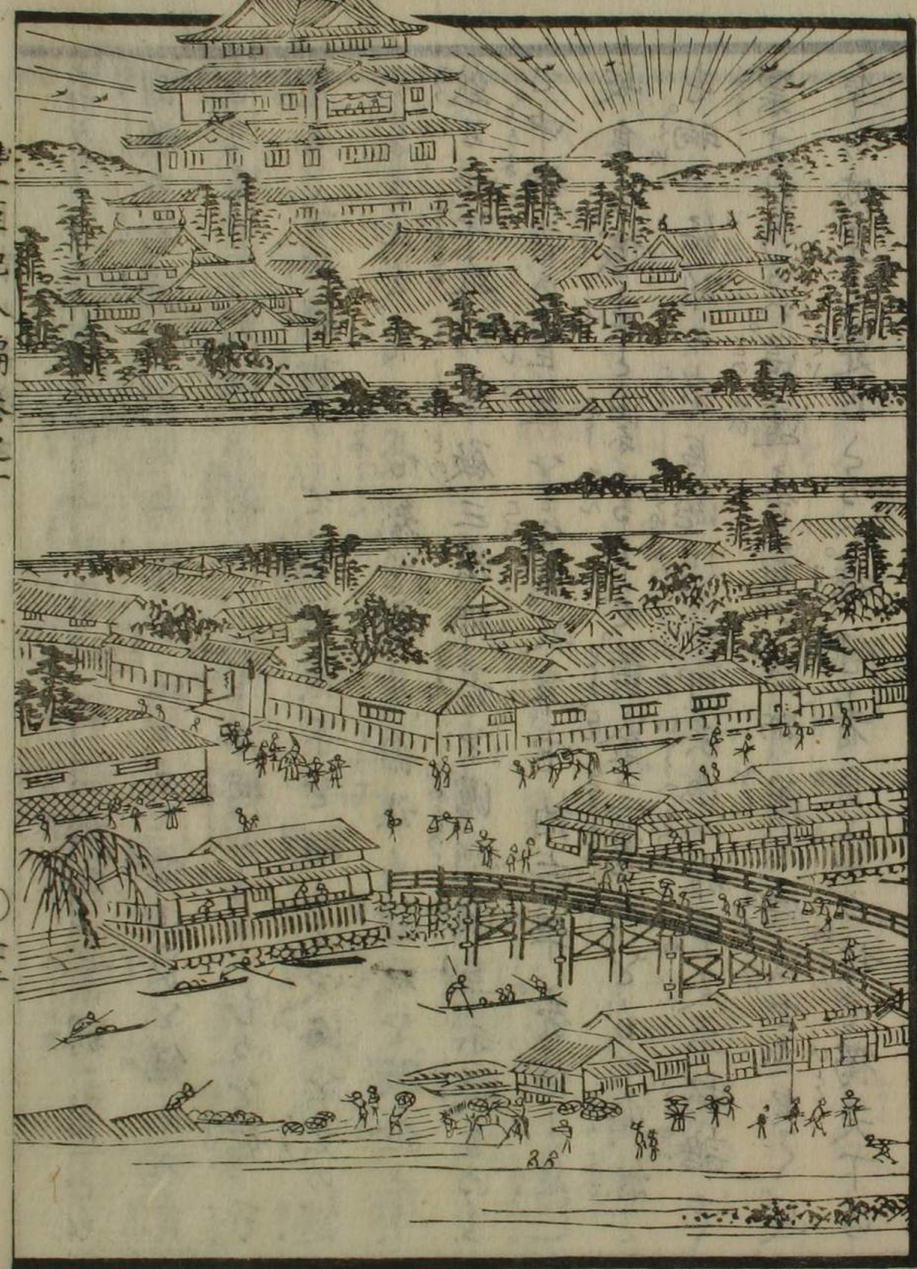
多門武辻金剛中村是あり。今食在而諦明あるゝを。唯一多
門の奮流のゝ。法隆寺の門弟ふ。乏窮活計て在るゞ。父と
兵助といひ子息を兵太夫と呼。秀吉これを招露され。淺野を
もつて傳所せるふ兵助老年あるをべ。継子兵太夫へ沛
工役を命属らゝ玉るべふ。頼稟されるふより。子息兵太
夫を招露さゝ。拝面命属らきんと。沛弟ふ招させらゝるる
ふ。秀吉渠ゞ身品相好。兵ふ勝をさるをべ大将熟く沛覧
あり。大張ある壮士るふ。自然と勇士の風備ありぬと宜ひ。
去ゞ〳〵感稱し玉ひるを。父ある兵助堂を拍て。又子も
備も警入る名将の沛眼力。逼ある子息兵太夫ハ。素野老
の実子ふあゝゞ。先祖ハ應神帝の長臣武内宿祢の後裔

巨勢辺江守金岡（大和国巨勢の住人）ゞ末流巨勢孫兵衛正義ある者。三
輪の神社の頼職あり。武勇の芳名ゝき不因て。松永
彈正久秀ふ怙まゝ。一遣織田家ふ敵〳〵まゝ。遂ふ和州
乾の坂ふ戰死を朝〳〵る頃至。子をもつて我ふ続〳〵。足
下のゝとして。番通ふもふ〳〵くまらゝをあば。現世ふおもひ
殘ふ〳〵と。特まゝ正義ハ。謀殺人の荷擔人ふゝども。舊交
の好ふ是非あく。我子とあ〳〵て養育。太子より傳来せ〳〵
大工の秘術法天あんど殘ふく相讓まゝと。仔細ふ言狀ふ
せ〳〵ゞ。秀吉ままく沛賞義あり。別地兵太夫を棟梁職
ふ命属らゝ。今より多門の苗字を革め。中村大隅橘正清
と。号るべ〳〵と命せらゝ（ふ中村の氏を賜りしハ四大工の内ふ中村の家ゝ
とゝるをそるつて綱まるふハちゝむ秀吉出生の地）

中村なるもつて此氏を稱るなり　若日を擇ミ。鑿徹所首の緯ありて。金銀の山ハ人技を勞ひ。意の隨ハ良材を得て。千珠万宝を交樓め。術を極め工を竭し。嚴ミ堂ミとして築ケ玉ふ。地の總名を大坂大秦ハ訓とべし と號し。城を平山城と稱へ奇。險ハ險ハ天下の堅地ハして。天の時を得。地の理ハ熟し。人の和最も叶帰して。從一至万缺る緯なく。経營全く成熟しりぬべ。天正十一年五月若日。秀吉金城ハ移らせ玉ふ。所も這城地へ東ハ葭芦生稠る沼澤らせ。北ハ湖水漂沱として。淀川を長く引。西ハ伯耆が洞海ハ繼々り。南一方ハ平ハして。生玉の社。一向宗本願寺御堂を敕め。曼陀羅院。摂本坊。真慈院。地藏院。持宝院。遍照院。覺園院。醫王院。觀音院。已上十箇寺の住地ありしが。此傍ハ代場の朱印を揚り。然して城を築らせ。秀吉いまゞ羨吉郎ハり時より。這地とも つく無双の勝區ありと。遂至。信長公へ言狀セしかば。織田殿此地を得まく欲し。志むく本願寺と接戦セしかど。門徒殊ハ強ク。りぬべ。信長も敵べきやうなく。治國の技助さるとも て。奏聞を遂らぬ。勅使を揚ふて速ハ。石山の地を開揖ま。その旨ともて本願寺。願如上人へ勅達ある。上人禁裏の勅を重んじ。居院を開て紀州ある。雑賀ハ退うまとり。其后際もふく本能寺の大変あり。遂ハ這ハ離ざりしが。所柴秀吉賢くも。大欲明智柴田を滅し。此ハ大君を設くる緯。是天生の武將と謂ふべし。斯て戦國の中ふきバ。

民家万業辨ぜんく。家居も跡ありける也へ。伏見の街の商民巣を這城外へ搬居しめ。伏見坂街両替坊など。称へさせて。接しめ。又手城外を御巡検あり。欠くると補ひ。少きと續ふく。残る隈なく御下辞ある。茲に城より南方五町など隔て。清水谷といへるあり。這谷より涌出する。泉最も勝れて軽甘なり。如何なる故にや這城中井の泉都て悪かりしるも。地脈よろしき處を撰で。屡々井戸を穿しめ。金銀をもて井幹とし玉ひ。井底に黄金を布て。黄金水など唱ふるなれども。茶の味全く調ねざれバ。彼清水谷の泉を留で。これを茶水に供ずるに。湖州金沙泉にも羞ることなく。瓊花雪乳淶々習々たり。猶も大将清水谷へ茶亭を建ら

せ千の利休を招て茶宴あり。其より西ハ櫻の連植を去つらせせらる（後世こく残さる畀といふ）風流奇絶を究めたり。備亦随侍の諸大名ハ。通達如意の地を撰で。第それぐに邸第を賜り（西谷町上の名ハ安国寺が住せし也へ今ハ安国寺坂といふ本町上三丁目谷畀より東へ登あしかりしかバ福島左衛門太夫に命じて是を修理せさせひちへ入らハこうと太夫殿坂といふその横畀に市兵衛ひち七人住居しけるともつて七新畀といふ御弓畀といふまき角井が邸址と呼茭畀といふ也久太郎の邸址と久左衛門畀といふ尻桐畀あやしきおとと尻桐畀余門黄堂各が随えおどろ呼ばれて今に茶城大坂に歴ぜんとり）武備嚴重の结構して。誠に枝桑第一の名城とこそ知らもさも浩りるなどに天下の威光。自然と羽柴殿の掌中に投ド。七道八極の諸大名。招ろざれども麾順ひ。恰も百花の東風に媚。万草薫風に伏せるが如く。遂る輩ハ天の時を。知ざるに似たりなど。罵られぬ者ハ



大阪平山城結構成就諸侯帰参万民繁昌の図

ホクリクリ。然ル中ホ北畠中将信雄卿ハ。柔弱ホまども偏嫉の心涼く。三法師丸秀信伝ともて。織田家を継しめ。秀吉ままく威勢ホ長ド。天下ホ将ここもるを妬。万望秀吉を殺戮して。愉快天下を領し。四海を亦の随ホホさんと。自の長短を顧ず。無謀も謀叛を敢企さり。然るホ比近羽柴殿。三法師君を濃州岐阜ホ投まわらセ。中納吉の官位を乞て。岐阜中納言平秀信と号し。岐阜の城主と崇号して。黄金三萬両ともて納綜とも。晌ホ伝雄の老臣滝川三郎兵衛一雅。主人ホ私語く稟されクるハ。這遭秀吉。三法師君ホ任度セさせく。岐阜の城主と定めらるハ。猿冠者自己ガ拔で。獨天下の

権を振り織田家を亡せん所存ホ亦敢企ホくんバ。ククホ〻ホ將を當の悔ホり。発存思ヒるべしと。勧めを信雄猶ホもとおもひ密然せんと。津川玄蕃頭迫春の恢の三重臣を招き。這事ともて発言クるホ。津川迫春平を又て稟されクるや。今秀吉の武威権勢。先君より猶廣大ホして。智謀鬼神も服まべし。這事急ホハ発しらくし。秀吉ガ内心ハ右も左も。明智を撃て亡君の報讐を全ふし。柴田を制して国家を安んド。勲功勘ホらるホより。上天子より下万民ホ至るまで。言く感ド弘く賞セ。信孝卿の事を亦ホセしハ。其道呼ホ〻ざるともて。

却て御身を亡し玉ひぬ。亂世の履を避とする輩。負ふをバ
猶少おろかなる。車を傳ふ急なる响へ。必ず足失ふ折るべし。
怖くハ隔心なく。家国を持ち玉ふこそ。是專一ふけら
んめと。淺井図田も品練して。真忠を舒るふぞ。瀧川忘
ふ保ぎといへども。理ふ稱ふる練言と。邪逆ふも無されぞ。
いろさま其理も緊要なり。然バ主君を高官ふ進まゝめ。波
阜殿の上ふ立まをさハ。伯父君といひ高位ふ列て。秀信卿
の威を拗げん。這義ハいろふと勸むるふ。主從是を宜とし。
當天の評義一決ふ。瀧川万事を料理て。京都へ発り公
卿達ふ。大金を絡ふ。内大臣ふぞ任ぜらるる

繪本豊臣勲功記八編卷之一了